

令和7年度 少年の主張

島根県大会

第54回島根県少年弁論大会

中学生の今の言葉で
伝えたいことがあります

令和7年

日時

9月30日(火) 10:00~15:15

場所

島根県芸術文化センター
グラントワ

主催／青少年育成島根県民会議、島根県中学校長会（主管：益田市中学校長会）、
独立行政法人 国立青少年教育振興機構

共催／益田市教育委員会

後援／島根県、島根県教育委員会、島根県警察本部、益田市、益田市青少年育成市民会議、
島根県PTA連合会、益田市PTA連合会



青少年育成島根県民会議
キャラクター
ハピネス

開会あいさつ

令和7年度「少年の主張島根県大会」の開催にあたり、主催者を代表しご挨拶申し上げます。

はじめに、県内各地区から選出された16名の発表者の皆さま、おめでとうございます。

また、本日はお忙しい中、来賓の皆さま、審査委員の皆さま、ご参加いただき誠にありがとうございます。

併せて、島根県ケーブルビジョン協議会様には、本大会の様子を毎年、各地域の皆様にご放送していただいております。今年度はひとまるビジョン様にご協力いただきますこと、感謝申し上げます。

また、本年度の会場である益田市におかれましては、「ひとづくり」や「人が育つ」という言葉のもと、地域での実践者が増え、子どもが主役になれる地域づくりを進めておられます。私ども青少年育成島根県民会議の取り組みの中でも、豊川地区を中心に活動する青少年団体「とよかわっしょい」や「益田市インターンの大学生」の活動を発表していただいたことがあります。発表を通して、子ども・若者と大人が対話しながら、市や地域のために活動する姿を感じることができました。今後、益田市内外で、子ども・若者がますます活躍する姿を楽しみにしています。

さて、「少年の主張」は県内中学生による意見発表の場として毎年開催しており、地域社会や世界への意見や未来への希望、家庭や学校生活、地域活動、友達との関わりなどについて、中学生の鋭い感性と素直な思いから生まれる「主張」を真っ直ぐに届けてもらっています。中学生は未来を担う存在というだけでなく、今を生きる存在ですので、今の社会に伝えたいこともあるはずです。

そして、この大会に参加する大人の皆さんには、発表を受け止め、それぞれにできる行動を起こし、子どもたちの「そばに居る良いモデル」であって欲しいと思います。

それでは、発表者の皆さん、本日は力いっぱい、自分の思いを主張してください。楽しみにしています。

令和7年9月30日

青少年育成島根県民会議
会長 高橋 賢史

目次

開会あいさつ	
大会風景	2
発表者のみなさん	4
審査結果表	5
発表作品	6
開催要項	22
審査委員・来賓	23
地区大会概要一覧	24
全国大会出場者・審査結果	25
全国大会「内閣総理大臣賞」受賞作品	26
あとがき	

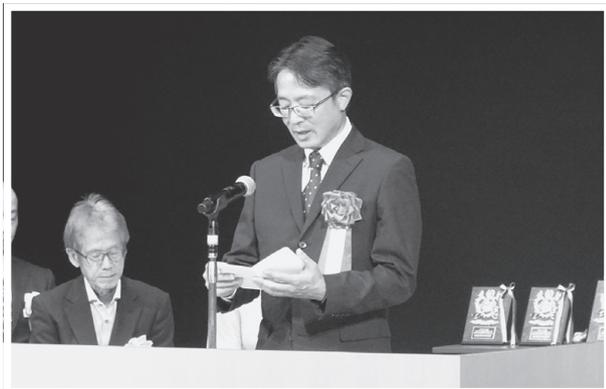
大会風景



開会式



青少年育成島根県民会議会長挨拶



島根県知事祝辞 (代読 益田児童相談所長)



益田市長祝辞



集合写真



審査委員長審査結果発表及び講評



島根県知事賞授与



島根県教育委員会教育長賞授与



島根県警察本部長賞授与



青少年育成島根県民会議会長賞授与



審査委員特別賞授与



審査委員特別賞授与



島根県中学校長会長挨拶

発表者のみなさん



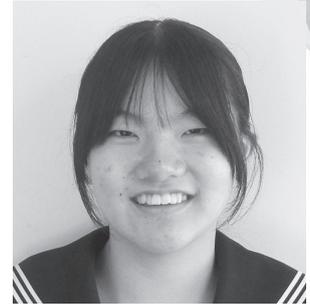
【松江市代表】
松江市立湖南中学校 2年
原 紳一朗



【松江市代表】
松江市立第一中学校 1年
若槻 亮太



【安来市代表】
安来市立伯太中学校 3年
柁瀬 桃乃



【出雲市代表】
出雲市立湖陵中学校 3年
今若 未結



【出雲市代表】
出雲市立向陽中学校 2年
梶谷 倅



【雲南市代表】
雲南市立三刀屋中学校 1年
森脇 歩花



【飯石郡代表】
飯南町立頓原中学校 3年
渡邊 陽南



【仁多郡代表】
奥出雲町立仁多中学校 1年
川島 莓香



【浜田市代表】
浜田市立第二中学校 3年
永野 玲未



【大田市代表】
大田市立大田西中学校 3年
河村 釉花



【江津市代表】
江津市立桜江中学校 3年
田中 萌愛



【邑智郡代表】
邑南町立瑞穂中学校 2年
猪原 瑠愛



【益田市代表】
益田市立小野中学校 3年
山根 遙人



【益田市代表】
益田市立匹見中学校 2年
齋藤 慈



【鹿足郡代表】
吉賀町立柿木中学校 2年
齋藤 望綺



【隠岐郡代表】
知夫村立知夫中学校 2年
河口 壮志

令和7年度（第54回）「少年の主張島根県大会」審査結果表

賞名	演題 (テーマ)	地区	学校名	学年	氏名
島根県知事賞	私にできるお手伝い (地域社会)	雲南	雲南市立三刀屋中学校	1	森脇 歩花
島根県教育委員会 教育長賞	あなたに会いたい (多文化共生)	隠岐	知夫村立知夫中学校	2	河口 壮志
島根県 警察本部長賞	不当な「正当化」 (国際問題)	出雲	出雲市立湖陵中学校	3	今若 未結
青少年育成島根 県民会議会長賞	私の好きな私 (自己)	益田	益田市立匹見中学校	2	齋藤 慈
審査委員特別賞	つなげる (家族との関わり)	益田	益田市立小野中学校	3	山根 遙人
〃	決意表明 (すべての人の幸せを願って)	安来	安来市立伯太中学校	3	梅瀬 桃乃
優秀賞	「一人じゃない」と伝えるために (内面の問題の克服)	江津	江津市立桜江中学校	3	田中 萌愛
〃	自分として生きる (人権)	松江	松江市立湖南中学校	2	原 紳一朗
〃	人間 VS AI (科学技術の発展と人間の在り方)	浜田	浜田市立第二中学校	3	永野 玲未
〃	石見神楽と共に (伝統文化)	大田	大田市立大田西中学校	3	河村 釉花
〃	「ありがとう」と伝えたい (家族や周りの人たちとのつながり)	松江	松江市立第一中学校	1	若槻 亮太
〃	私にできること (社会貢献)	鹿足	吉賀町立柿木中学校	2	齋藤 望綺
〃	未来へつなぐ (平和)	邑智	邑南町立瑞穂中学校	2	猪原 瑠愛
〃	「買えない」を「変える」 (地域社会)	飯石	飯南町立頓原中学校	3	渡邊 陽南
〃	「普通」とは (個の尊重)	出雲	出雲市立向陽中学校	2	梶谷 倅
〃	変わらないもの (家族からの学び)	仁多	奥出雲町立仁多中学校	1	川島 苺香

※ 審査委員特別賞、優秀賞については、発表順に記載しています。



島根県知事賞

私にできるお手伝い

雲南市立三刀屋中学校
1年 森脇 歩花

皆さんは、人のために何かしたいと思ったことはありませんか。

私がそう思ったきっかけは、体に持病を持った、友達からの相談でした。

「私、ヘルプマークをつけようと思ってるんだ。」

最初にその言葉を聞いたとき、小学6年生の私は、なんと声をかけてよいかわかりませんでした。ヘルプマークという言葉を知ったことがなかったからです。それから私は、ヘルプマークについて調べてみることにしました。

ヘルプマークとは、このような赤いカードで、東京都の福祉局が作られました。主に持病や障がいを持っている方が、「配慮や援助を必要としています。」と周囲に知らせるマークだということが分かりました。

それから私のヘルプマークへの探究心はどんどん深まり、調べているうちに、逆ヘルプマークに出会いました。

先ほど言ったように、ヘルプマークは、周りの人に助けを求めるマークですが、逆ヘルプマークは、その逆で、ヘルプマークをつけている人を助きたい人がつけるマークです。このマークは、静岡県の小学生が、難病のお兄さんのために発案したそうです。

逆ヘルプマークを知った私は、「このマークいいなあ。つけたら誰かの助けになれるかも。」

と思い、外出時に、かばんにつけてみました。ですが、私が思ってもみななかったことが起こりました。

「大丈夫ですか。」

見知らぬ女性に私が言うべき言葉をかけられてしまいました。「助けてください。」という意味のヘルプマークと勘違いされてしまったのです。

私はそこで、逆ヘルプマークも認知度が低いことを痛感しました。ヘルプマークもあまり普及しておらず、さらに、公式には逆ヘルプマークがまだ認められていないためか、あまり知られていなかったのです。

ですが、世の中には外出時に発作などで助けを必要としている人が私の友達のように少なからずいるのです。

「どうすればもっとヘルプマークの認知度が高くなるのだろう。」

私は、「ヘルプマークのポスターを貼ってみない。」と、相談を受けた友達に提案すると、「いいね。」と賛成してくれました。先生に相談し保健室前の掲示板に私と友達で作ったポスターを貼らせてもらうことにしました。「ヘルプマークや、逆ヘルプマークを知ってもらいたい。」という思いで、一生懸命作りました。ですが、読んでもらうことはあまりありませんでした。小学生には少し難しかったかもしれません。だから、中学生になった今、また、ヘルプマーク、逆ヘルプマークをみなさんに知ってもらい取り組みにチャレンジしたいと思っています。

私は今、逆ヘルプマークを外出時に持ち歩くことや、困っている人に声をかけるよう心がけています。

自分が誰かの助けになれるのなら、誰かを笑顔にできるのなら、私は、とても嬉しいです。

私は、小学生の頃から貴重な体験をさせてもらえる地域の環境で育ちました。今までに、町おこしイベントの司会や、大人の方々が参加しておられる地区計画策定の会議にも出席するなど、まちづくりの活動に参加させてもらえました。様々な交流を通して、私は地域の方々に、「ありがとう」と言ってもらえることが多くなりました。その言葉が私にとって一番の原動力です。このような活動を通して、私は、自分にもできることがたくさんある、と自信を持てるようになりました。

そして今は、援助を必要としている人の力になりたいと思うようになりました。

今回は、ヘルプマーク、逆ヘルプマークについてお話ししましたが、この他にも、バスや電車の中にある優先席や、点字ブロックなど、多くの助け合いの仕組みや、お手伝いができる機会があると思います。私たち小中学生にできることは少ないかもしれないけれど、勇気を出して、誰かのために行動することは、人との交流や、自分の成長につながっていくと思います。

みなさんも自分の可能性を広げる取り組みにチャレンジしてみませんか。



島根県教育委員会教育長賞

あなたに会いたい

知夫村立知夫中学校
2年 河口 壮志

「自己中やん、中国。尖閣諸島は日本のものやろ。」

「中国製品なんか使いたないわ。」

友達の言葉が、私の心をグサグサ突き刺す。そのたびに私は、まるで自分が悪いことをしたかのようにつらく、やるせない気持ちになりました。

「中国のすべてが悪いわけじゃない。」

初めてそう言えた小学生のとき、私は一つの夢を持ちました。国籍や民族、文化の違いを越えて、誰もが笑って暮らせる世界を創ることです。

私の母は中国人です。日本に来て20年になります。今、日本で暮らす外国人は過去最多の376万人。最も多いのが中国人です。「**我叫河口壮志 可以说一些中文 有困难请跟我说**」(私は河口壮志です。中国語が話せます。困ったことがあったら言ってね。)

中国語を話せる私ならたくさんの人の役に立つことができる。誰もが笑って暮らせる世界を創る。しかし、のぞいたSNSには怒りと憎しみがあふれていました。日本と中国は長い歴史の中で深く関わってきました。だからこそ、思いも複雑に絡み合い、怒りや憎しみにつながる。頭では理解できても、心は真っ二つに引き裂かれるようでした。私は生まれ育った日本が大好きです。家族や友達と暮らす国、日本。しかし、同じくらいに中国も好きなのです。広大な風景も。上海の高層ビル群も。「可愛可愛」と抱きしめてくれる親戚や近所の人たちも。大好きなのです。この思いに国籍や民族の違いがあるのでしょうか。悩む私にこんなことを言ってくれた人がいました。

「大学のころ、一緒に勉強していた中国人留学生の張さんは、とてもいい人だったよ。私、張さんが大好きだったー。」

国籍や民族にとらわれず、目の前の人と出会い、分かり合うとすること。誰もが笑って暮らせる世界はそこから始まるのかもしれない。

この考えが確かなものになったのは、その後訪れたブータンでの経験からでした。私は高校3年生のタシーさんと出会い、仲良くなりたい一心で、お互いの母語ではない英語で話をしました。何度も言い直したり、ジェスチャーを交えたりしながら、何とか思いが伝わり、笑い転げたときの嬉しさは一生忘れません。

国籍や民族、文化の違いは無理に越えようとしないでいい。人と人が出会い、分かろうとすることで自然と越えていける。だから私はあなたに会いたい。あなたと話したい。あなたと分かり合いたい。あなたと世界を創っていきたい。今の私にできることは何だろう。浮かんだのは母の姿でした。

母は今、在日外国人の相談員をしています。日本で生きてきたすべてを生かして、目の前で困っている人の力になろうとしています。「今が一番幸せ。」と笑う母は私の誇りであり、目標です。

私も地元の観光協会のサポートを受けながら、中国語のパンフレットを作り始めました。地区の人を招いて、流しそうめんイベントもしました。総勢30人で食べて話して盛り上がりました。まずは人と人が出会う場を創る。その第一歩を踏み出しました。誰もが笑って暮らせる世界を目指して。

島根県警察本部長賞

不当な「正当化」

出雲市立湖陵中学校
3年 今若 未結



「ゴキブリ、母国へ帰れ。」

みなさん、この言葉を聞いて、何を感じますか。私は「母国」という言葉がひっかかりました。実は、私たち日本人がこの言葉を外国人に向けて発したものです。外国人への偏見、差別意識により「自分とは違う人」として外国人を扱い、侮辱するために「ゴキブリ」に例えられました。ここである疑問が頭の中に浮かびました。なぜ、「自分とは違う人」として扱い、相手を侮辱するのか。正しくない考えということに気付けないのか。このような偏見は私たちの無意識のうちに形成され、社会全体に大きな影響を及ぼしているのではないのでしょうか。本来は正しくないことですが、多くの人に発信し共感されることで正当ではない考えが広がっていく。私はとても腹立たしく歯がゆい気持ちになりました。なぜなら私には中国人の友達がいるからです。最近私は、次のような言葉を耳にしました。「うわ！これ中国製なの？！コロナ製造国じゃん。」

この言葉を聞き、今まで見聞きしたネットだけの外国人を差別する世界が自分の身の回りに広がっていることに驚き、同時に自分の友達の国や友達が侮辱された気持ちになりとても胸が苦しくなりました。どうして使っている製品や身に着けている衣服が中国製とわかると、勝手な偏見でその国の人全員を悪く言う人が多いのでしょうか。

しかし、私も自分の行動を振り返った時にある事実に関心し、はっとしました。それは、私が通う英会話教室のオンライン授業を予約するときのことです。オンライン授業では先生を指名しますが、その際スタッフさんに私はいつもこう言います。「優しそうな先生をお願いします。」そして画面に、ヨーロッパ系の先生が映ると私は、少しほっとしていました。私は、い

つも無意識に画面に映る先生を見て、白人の先生を「優しそうな先生」と判断してしまっていることに気付きました。「白人の先生＝優しそうな先生」という考えを抱いている。そう気付いたとき、私はこの言葉が頭をよぎりました。「ゴキブリ、母国へ帰れ。」私はこの言葉を発したわけではありませんが、やっていた行為は同じだと感じました。無意識に私も外国人に偏見をもっていただけに気付かされ、いたたまれない気持ちになりました。

自分の考えや行動を正当化することは誰でもあると思います。しかし、この世の中に「ゴキブリ」と言われるべき人はいません。集団で差別的な言動を特定の国や民族に向けたヘイトスピーチの中で、いつの間にか「自分とは違う人」という境界線ができてしまうことが問題だと思います。身近で差別的な言動が広がり、やがて相手を攻撃するヘイトスピーチとして今、大きな社会問題に発展しているのではないのでしょうか。現在は、情報過多の時代でSNSでの誹謗中傷や悪口などがあふれています。私は、この社会を生きる一人として人の噂話や情報に流されず、正しいかどうかを立ち止まって考えたり取捨選択したりして見極める力を身に付けたいです。もし、学校生活で特定の人に向けた嫌な噂や情報を耳にしても、感情的に反応したり、興味をもったりせずに「本当かな？」と一回考えて噂話に惑わされないように気を付けていきたいです。もし、うわさが本当だとしても私は悪口などの汚い関係でつながらず、お互いが高めあっていけるような関係を築きたいです。

私は、外国人への偏見について少し他人事だと思っていました。あなたも、無意識のうちに噂や偏見、根拠のないような、不当な情報を「正当化」していませんか。



青少年育成島根県民会議会長賞

私の好きな私

益田市立匹見中学校
2年 齋藤 慈

小さいころから「もっと周囲に気を配りなさい」「もっと周りの人のことを優先しなさい」「自己中心」「マイペース」と言われてきました。当時はまだ小学校低学年くらいだったので、「何で周りを優先しなきゃいけないのだろう」「別にマイペースでもいいじゃん」と思っていました。

ですが、小学校中学年くらいになると、その言葉の大切さに気づき始め、「もっと周りの人を大事にしなくては」と思うようになりました。私のすぐそばにいる人たちは全て、私の大切な人。だから大事にしたかった。笑顔にしたかった。笑顔でいてほしかった。そう思って、元気に明るくふるまっていました。それが私なりの「周りの人を大切にする方法」だったのです。「他人を大事にする」この在り方は間違っていない。正しいんだ。大切な人たちが笑顔になってくれると私もうれしい。そう感じていたから、朝、学校に来て、教室の雰囲気が暗いと思ったら笑顔を作り、ハイテンションでいるようにしました。そうすればみんなが笑顔になってくれる。教室は明るくなる。これでいい、これがいい。私はこういうキャラだ。そんな気分じゃなくてもやらなくては、と言い聞かせていました。そうやって自分にムチ打つことが積み重なっていき、少しずつ、少しずつ、明るくふるまうことが辛くなっていきました。でも、他人のことが優先。また誰かを笑顔にしたい。私はまだ大丈夫。今度自分と対話して、メンタルケアをしよう。そのようにして、また今度、また今度、まだ自分は大丈夫、大丈夫と先延ばしにしていました。

そうやって過ごしていたある日、学校で心の主導権の話を書きました。それをきっかけに、私は自分の心としっかり向き合いました。する

と、私が思っていた以上に、私は疲れていて、自分のことを全然大事にできていなかったことに気づきました。他人を、誰かを大切にする、その中に私自身が入っていなかったことに気づき、ハッとしました。私は周りの人にも、自分にも、喜びや幸せ、楽しいという感情からくる笑顔になってほしい。そう思いました。

その時から「周りの他人を大切にする」という在り方から、「周りの他人も『自分も』大切にすること」という在り方になりました。こうなったことで、私は定期的に「今の心の状態、大丈夫?」「無理をして辛くなってない?」と、自分に問いかけるようになりました。自分を大事にすることで、前よりももっと他人を大事にできるようになりました。自分を大切にすることから、苦しい、悲しいといった感情の時に、しっかりその気持ちと向き合い、受け止めることができ、心が楽になりました。笑顔を作り、必死にその場を明るくしようとしていた朝も、元気が出ないときは自分も静かに過ごす。元気な時は周りの人に声をかける。その日のありのままの自分でいられる朝になりました。そうなれたことで、朝の教室は思うほど暗くなかったこと、私が無理をしなくても、自然と居心地のいい空気になることに気づき、安心できました。

皆さんはどうですか。皆さんは自分のことを大事にできていますか。自分のことが好きですか。私は皆さんに自分のことが好きでいてほしいです。皆さんの好きな自分ってどんな人ですか?一度立ち止まって、考えてみてください。

私はまだ、意識しないと他人も自分も大切にはできません。いつか無意識のうちに、他人も自分も大切にできる、そんな人になりたいです。それこそが私の好きな私だから。私のことが好きな私でいたいから。



審査委員特別賞 つなげる

益田市立小野中学校
3年 山根 遙人

「うざっ。」

「もう、だまれよ。」

「あー、もううるさい！」

ひどい言葉が壁を切ったように次から次に僕の口から飛び出した。止められなかった。

僕の祖母は脳梗塞の後遺症のため、手足に麻痺があり、呂律が回らず、言葉がはっきりしません。一日中ソファーに座って過ごしていますが、用事があると家族に話しかけてきます。でも僕は祖母が何を言っているか分かりません。他の家族にも祖母の要求は伝わらないことが多く、苛立った祖母の声が僕の部屋まで響いてくることもあります。そんな状況に正直イライラしていました。次第に祖母と関わるのが面倒くさくなり、

「わかった、わかった。」

と適当に受け流したり、他の家族に任せたりして、僕はいつも祖母から逃げていました。

僕と祖母の二人きりになったある日、祖母が話しかけてきました。

「リモコン？ エアコン？ 暑いのか？」

「何？ お腹すいた？」

いろいろ尋ねてみたけれど、何を言っても違くと首を振るし、祖母の声も大きくなるので、僕はどんどんイライラしました。我慢できなくなった僕は、

「もう、うるさいな。黙れよ！」

と大声で怒鳴ってしまいました。思いが伝わらない祖母も苛立ち、言い合いはエスカレート。そして最後には二人とも黙ってしまいました。最初は「話が伝わらないあっちが悪い。脳梗塞になったおばあちゃんが悪い。」と自分を正当化しようと必死になっていたけれど、次第に「ひどいことをやってしまったな。でも今さら謝れ

ない……。」二つの気持ちが混ざり合って複雑な気持ちになりました。

祖母は昔、子ども服のお店をしており、おしゃべりが大好きだったそうです。母は介護が辛くなった時、そんな祖母の姿を思い出すそうです。そして、もしこのまま祖母がいなくなったらきっと後悔してしまう、後悔ないようにしようと気持ちを切りかえ、祖母に接しているそうです。母にもそんな葛藤があるんだと知った僕は、「辛いのは僕だけじゃない。祖母から逃げず、ちゃんと向き合おう。」そう思いました。

「おばあちゃん……この前は……ごめん……。」

勇気を出して謝りました。すると祖母は笑顔で許してくれました。「いいよ。」と言葉では言えていなかったけれど、あの時、確かに僕のことを許してくれたと思います。

何かに苛立ち、その苛立ちをぶつけて後悔してしまうことは誰にでもあるはずですが。介護の場面に限らず、思春期の僕たちは、イライラを抱え、悩むことがよくあります。でも、その苛立ちや後悔など自分の中のマイナスな気持ちを否定して、無理になくそうとせず、それをしっかりと受け止めて、気持ちを切りかえ、素直に相手に伝えれば、前に進むことができるはずですよ。

お客さんとおしゃべりが大好きだった祖母。その姿を思い出し、心の支えにして頑張る母。だから、僕はどれだけ時間がかかっても、祖母とおしゃべりを楽しみたいと思うのです。

あの時許してくれた祖母の笑顔と、介護を頑張る母の笑顔のために。そして、いつか祖母とおしゃべりが僕の笑顔につながるように。



審査委員特別賞 決意表明

安来市立伯太中学校
3年 梅瀬 桃乃

胸に手を当てて自分の心に問いかけた。
「未来を背負う私達、希望と誇りがもてる平和な世界を実現するため、今を生きる私になにができるのか」

姉がやっている書道パフォーマンスを見て感銘を受けたと同時に、そう問われたことが胸に刺さり、私は自分の心にずっと問いかけていました。

紛争や災害のニュースに衝撃を受け、その映像に胸がぎゅっと締め付けられたり、なかには涙がこみ上げたりするほどの映像もありました。みなさんも同じ思いを抱いたことがあるのではないのでしょうか。その時の私は、自分に何ができるのかと考えてみましたが、コンビニにおいてある募金箱に数円入れたぐらいでした。

いつもと変わらない日常を送り、日々更新されるSNSなどの情報とともに過去の出来事にして行動しなかった私にその問いは深く胸に刺さりました。それと同時に、私の心が動いた瞬間でした。

今を生きる私に何ができるのか考えたとき、思い浮かんだのは小学校6年生のときに行ったボランティア活動でした。

自分にできることは小さすぎてなにも変わらない。そう思っていた私とウクライナやアフリカなど世界各地の違う国で暮らす人々を繋いでくれたのは「服のカプロジェクト」という難民に服を届ける活動でした。校内や地域の方に呼びかけなくなり子供服を集めました。サイズごとに分けて畳む作業は気の遠くなるような作業でしたがやりがいがありました。回収量は段ボール50個以上、たくさんの人が活動に賛同してくれたことを目に見えて感じました。

世界で起きている問題を知り、その人々の気持ちに寄り添い、役に立つことが少しでもできるのだと実感しました。

あの時の経験を活かし、今の自分にもできることはある。そう思い生徒会に立候補するとき学校のみんなでボランティア活動ができたらと

考えました。

しかし、どんな活動ができるのだろうかと調べると、ボランティア活動は偽善だという声がネットに溢れており、私の決意は簡単に揺らぎました。私自身も「ボランティアっていい人だと思われたい人がするよね」と言っている人の声を聞いたことがありました。めんどくさいと思う人がいるのではないかと、偽善だと思われるのではないかと思い、私は公約にかかげることができませんでした。

生徒会に入ってから行動できずにいた私は姉にそのことを話しました。姉は自分が使っていたランドセルをアフガニスタンの女の子に寄付したり、子ども食堂などのボランティアに参加したりしています。

姉は、誰かの役に立ちたいと思い行動したけれど活動を通して自分のほうが与えてもらったものは大きい、それを自己満足とか偽善とか言う人がいるなら、私は自己満足でも偽善者でもいいと言いました。SNSの誰が言ったか分からない言葉より、行動し経験している姉の言葉は力強く私の背中を押してくれました。確かに自己満足だ偽善だと言って何もしない人より、たとえきっかけが自分のためだったとしても行動しそれが誰かの役に立つならその方がいい。

私の心が動いたように、本気の思いは必ず伝わる。

こうして言葉を尽くし、この6分間に思いを込めて伝えることも今を生きる自分にできることだと気づきました。

中学生の今、私の言葉で伝えたい。

自分の道を選べること、自由に人を好きになれること、誰もがお腹いっぱい食べられること、世界が争わず平和であること、理不尽に命を奪われないこと、美しい地球を壊さないこと、この思いを繋ぎたい。この決意表明がたくさんの人の心を動かすと信じて、全ての人の幸せを願って声を大にして宣言したい。

私は単なる傍観者ではられない。

優 秀 賞

「一人じゃない」と伝えるために

江津市立桜江中学校
3年 田中 萌愛



「ねえ、なんで何も言わないの。どうせ何でもいって言うんでしょ。」小学4年生の時に塾の友達に言われた言葉。この頃の私は人を信じる事が出来ず、大勢の中に居ることに苦しさを感じていました。「萌ちゃんはね、人に自分の意見が言えなくて悩んでいるんだよ。」間に入ってくれた人が言った時、友達は言いました。「そんなの知らない。悩んでること、言わない萌ちゃんが悪いじゃん。」と。

私のことを知ろうとしてくれないことへの孤独感、言っても分かってくれないだろうという諦め。「自分はなんて弱い人間なんだろう」という思い。そんなことが積み重なるうちに、私はどの集団にいても周りからの目が気になるようになり、自分の殻に閉じこもるようになりました。

しかし、小学6年生の頃、担当のカウンセラーの先生が、「萌ちゃん、知ってた？知らないって言って自分の言葉の責任から逃げて、相手を傷つけたことも知ろうとしないのは、本当の弱い人だよ。」相手に気持ちを話せない自分を責めていた私に、カウンセラーの先生は、違う見方を教えてくれたのです。“知らない”で終わらせる無関心が、人を傷つけることに気が付きました。

中学1年生の頃、クラスに馴染めなかった私のことを、担任の先生やクラスの友達は“知らない”で終わらせませんでした。苦しい気持ちの私に寄り添い、知ろうとしてくれました。私の悩みを受け入れてくれ、私を認め、隣にいてくれました。

悩みを抱え込んでいた時の私は、暗い顔で下を向き、周りと関わりを持とうとしませんでした。しかし、たくさんの人が私の弱さを責めずに受け入れてくれたことで、自分に自信が持てるようになりました。今の私は、ありのままの自分で人に接することができ、自分らしく、夢に向かって挑戦しています。

振り返ってみると、私が変わるきっかけがありました。カウンセラーの先生の言葉で、「弱い自分を責めなくていい」と気づきました。そして、“知らない”で済ませず、私に向き合ってくれる人の存在。強くなることを求めすぎず、弱さを含めた私を認めてくれました。だから、辛い場所からは遠ざかり、ありのままの私でいられる新しい場所に飛び込む勇気をもつことができました。そして人が変わってくれることを願うのではなく、自分の行動を変えることができたのです。

“知らない”という言葉は相手と向き合うことを放棄すること。悩んできた人をさらに傷つける言葉です。“知らない”と突き放すのではなく、知ろうとする優しさ、声をかける勇気が誰かの救いになるかもしれません。

今、孤独や孤立に関する社会の問題が増えています。2025年は6月までの半年間で約1万5千もの命が孤立死で失われ、昨年より大きく増えています。いじめも孤立死も虐待も“知らない”という無関心が問題を大きくします。「孤独を感じる人に誰か一人でも向き合う人がいれば。」「私がその一人になりたい。」と考えます。

今、私は自分を出すことへのためらいがなくなり、人との間の距離や壁を感じなくなりました。

辛く苦しかったあの頃の私に言いたい。「本当の自分を見せることをためらわないで。自分の心の声に向き合い、自分を変える一歩を踏み出せたら、白黒だった世界がカラーに変わり、楽しいことが増えてくるよ。選択肢は一つじゃない。」

頑なだった私の心をほぐし、受け入れてくれた仲間の存在が私を変えました。この体験を通して、今苦しんでいる人に「一人じゃない」と伝えたい。そしてみんなへ。「知らない”で済ませないで。相手を知ろうとする優しさが誰かの救いになるから。」



優 秀 賞

自分として生きる

松江市立湖南中学校
2年 原 紳一朗

自分らしく生きるということはすごく難しい。そして、とても素敵なことだ。

小さい頃の好きな遊びは、プリキュアごっことかおままごと。一緒にいる子は男の子もいたけど女の子がほとんどだった。自分の好きなことをして遊んで楽しむ姿は自分らしかった。だが、そんな日々は変わっていく。

「何か違う。」と思ったのが小学校の制服だ。短いズボンに白いカッターシャツ、青い上靴。男子用の制服だ。違和感だった。成長するにつれて、その違和感が何か分かった。「嫌だったんだ。」ズボンをはいて男の子でいることが。女の子でいたかったから。でも、隠さないといけない。馬鹿にされるのが怖いから。心は女の子なのに、「男の子」でいることは苦しかった。周りは、そんなことを知らず、「おかま」とか「女たらし」、「ホスト」とか平気で言う。悲しいのは人を好きになることだ。好きになるのは男の子。男子が男子を好きになるなんて気持ち悪いと何度も思った。好きになったら諦めるの繰り返しで、ほとんど毎日泣いて過ごした。布団に包まって、「何で自分は女の子になれなかったんだろう。何で自分は男の子なんだろう。」と。中学校でも悩みは絶えない。皆と接しているのは違う自分だ。死のうと何度も思ったけど死ねなかった。そこには、もう本当の自分はいなかった。

そんなある日、テレビでアイドルが楽しそうに踊っているのを母と観ていた。「自分らしくていいな。」僕も自分らしくできたらなと。もうどうにでもなれとその場で母に今の自分の本当の気持ちを伝えた。初めてのカミングアウトだ。母は笑って、「そんなの知っとるわ。」と言ってきて、それが救いだ。僕は涙目で笑っ

た。母に話したら何だか気持ちが楽になった。だから勇気を出して仲の良い友達にも話した。何を言われるのかが分からず泣きながら。友達は僕に何も言わずに一緒に泣いてくれた。「大丈夫だよ。」

その日からは自分らしく生きていこうと決心し、髪も伸ばし、リュックにピンクのキーホルダーを付けたり、トランスジェンダーということ普通に言うようにもなった。でも、ひとつだけ足りなかった。スカートだ。憧れだった。一生履けないと思っていた。だけど、ある日夢を見た。スカートを履いて出かける夢を。それがどんなに素敵だったか。この夢は現実にするべきだと強く思った。姉の友達からスカートを貰い、履いた日を一生忘れない。どんなに心地が良かったか。スカートを履いて学校に行った日は、泣かないようにと母にハグをし、お腹が痛いのを我慢して行った。自分を見るたくさんの視線がよく分かった。中には可愛いと言ってくれる友達もいて嬉しかったし、安心できた。

でも、数日スカートを履いてみて、スカートを毎日履くのも何か違うと思った。「そうだ。僕は100%女の子じゃなくていいんだ。」そう思えた日からは、この低い声も手の大きさも好きになることができた。今の自分は本当の自分だ。輝いている。

もちろん、今もこれからも辛いことはあると思う。だけど、自分らしく乗り越えていきたい。皆さんの中にも、自分を出せない人、押し殺している人がいるなら、勇気を出して、自分らしくしてみてもどうだろうか。今よりも、もっといい日常が送れるはずだ。誰かは分かってくれる。誰も分かってくれなくても、僕が分かっ



優 秀 賞

人間 VS AI

浜田市立第二中学校
3年 永野 玲未

皆さんは、AIと人間のどちらが有能だと思いますか。

例えば、最近、レストランで見かける猫型配膳ロボット。今は配膳するだけのロボットですが、お客さんの注文履歴を把握して好みに合ったお勧めができるようになれば、人間のバイトの出番はなくなってしまうかもしれません。また、生徒のレベルや性格に合わせた教育プログラムで、楽しくやる気スイッチを押してくれる先生AIが登場すれば、もしかすると、学校の先生という職業がなくなってしまう、なんてこともあるかもしれません。そして私が好きな音楽の世界でもAIの活用が研究されており、人間の演奏家は必要なくなるのではないか、という意見も耳にします。いつかAIは人間を超えるのでしょうか。AIによって人間の居場所は追いやられていくのでしょうか。

私は吹奏楽部に所属しています。放課後や休日を使って、1日約2、3時間は練習しています。メインの県大会前になると、夏休みでもほぼ毎日練習で、私を含め多くの部員がへとへとになります。みんなの音が合っていないところがあると、そこを何度も何度も繰り返し練習して、喉はカラカラで息も苦しくなります。でも、その苦しさを全員で乗り越えて臨む本番の演奏は、それまでコツコツと頑張ってきた努力への自信や、だからこそ、失敗したくないというプレッシャーを乗せて、何とも言えない、厚みのある音になります。信頼する先生の指揮のもと、仲間の音と自分の音に全神経を集中し、心をひとつにして作品を作っていくその瞬間、私たち二中吹奏楽部にしか出せない、味わいのある演奏になっていると思います。

では、AIはどうでしょう。

AIなら過去の名演奏を瞬時に解析して、各楽器が音程やテンポを外すことなく、楽譜通りにカチッとハマったミスのない演奏をすることが可能でしょう。また、AIは演奏者の動きや音色をリアルタイムで把握すると同時に、少し

先の演奏部分を予測し、絶妙なタイミングで他の楽器と音を合わせることもできるでしょう。実際、名ピアニストの演奏を再現したAIと、人間のバイオリニストたちがライブ演奏をするというコンサートが行われたこともあります。もし、そのような技術的に完璧なAIの演奏を聴いたら、人間が演奏する必要のないよねと感じることが起きるのかもしれませんが。

このようにAIの技術がますます進歩していく中、かの有名なプロスケーターである羽生結弦選手は、あるインタビューでこんな話をされていました。「疲れてきついなと感じてからの演技は、AIには真似のできない、人間でないとできない表現だと思う。」と。私はこの言葉を聞いた時、AIには超えられない、人間だからこそその領域が必ずあるのだと実感しました。何度転んでも、何度でも挑戦してジャンプし続ける羽生選手。その練習風景を観て、AIにも負けない人間の領域は、人間の生身の体を通じた『努力』によって、これからも残し続けられるのではないかと思います。

では改めて、私たち人間がAIに負けない活躍をするためには何が必要でしょうか。

私は、AIの『完璧』を超える『センス』が必要だと考えています。センスとは、物事の微妙な味わいを感じる心の動きのことです。このセンスを磨くために、今、私たち中学生がやるべきことは、勉強や部活動など多くのことに挑戦し、努力し続けることです。その過程で自分らしさを見つけ出し、それぞれの個性や感性で、微妙に違う何通りもの解を導き出す。そのような努力をし続けて行けば、AIに追い付かれることのない人間の居場所を残すことができると思います。さらには、人間の方が有能な領域を新たに作っていくことも可能だと信じています。

皆さん、そんな未来を一緒に作っていきませんか。



優 秀 賞

石見神楽と共に

大田市立大田西中学校
3年 河村 釉花

(拍手)

「感動しました。」

お客様のその一言で私は救われました。

皆さんは、石見神楽をご存じですか。

石見神楽は、石見地方に伝わる伝統芸能で、勇壮かつ華麗な舞が特徴です。地域のイベントや、婚礼の余興、お宮の行事などで奉納されています。今年の大阪万博でも上演され、全国に知られつつある存在です。

真っ暗な温泉津の街に、明かりを灯す、石見神楽。舞い手が、長年受け継がれてきた衣装に袖を通し、神楽面をつけることで、その姿に命が宿る。

衣装の豪華さに劣らない、舞の美しさや、一つ一つの所作の丁寧さに惹かれ、「神楽を見たい」という気持ちから、「神楽をしたい」という気持ちに変わり、私は、地元の神楽団体である、「石見神楽温泉津舞子連中」に入団しました。

小学4年生になり、初めて、緋色の袴を買ってもらった日。

「これでもっと、神楽ができる。」

と思い、より一層神楽に打ち込み、神楽が大好きになったのを今でも覚えています。

気が付けば、私の人生には石見神楽があり、それが当たり前だと思って生活してきました。

だからこそ、神楽を受け継ぎたい、魅力を伝えていきたいと、強く思いました。

しかし、中学1年生の夏、膝に鋭い痛みが走りました。病院へ行き、手術でしか治すことができないと知らされましたが、成功確率や、リスクの大きさを考えて、手術を断念しました。

さらに、正座は関節に大きな負担をかけるため、ドクターストップをかけられてしまい、今まで通り神楽を続けることは難しくなりました。

神楽が好き。膝のことなんかで神楽から離れたくない。それでも膝の痛みは常に私を苦しめ続け、次第に、思うように神楽ができない自分が嫌いに

なりました。

「私はこれから、どうすればいいのだろう。神楽とどう関わればいいのだろう。」

いくら自分に問いかけても、答えが出るはずもなく、悶々と悩む日々が続きました。

ある日、同じ団体の友人に誘われて、神楽に見学として参加しました。今までと違って、幕の裏側で、棒立ちだった私は、無力で、ただぼんやりと幕を見つめることしかできませんでした。

公演後、私は記念撮影の手伝いをしました。小柄な女性に頼まれて、大蛇の頭とその方の記念写真を撮りました。カメラを返そうとしたとき、その方はまるで恵比寿のような笑顔で、

「感動しました。」

とおっしゃいました。

私はあの日、ほとんど神楽に関わっていなかったけれど、神楽を見て感動してくれる人がいることに、嬉しさを感じました。私は今まで、「感動した。」「圧倒された。」といった言葉を耳にして、うれしいと感ずることができたのは、表舞台に立った人だけだと思っていましたが、それは間違いでした。

神楽を創るには、表舞台に立つ舞い手を支える裏方が必要不可欠で、そのどちらも、想いを一つに神楽をしているからこそ、嬉しさを分かち合うことができるのだと気づきました。私の想いは一つだけ。

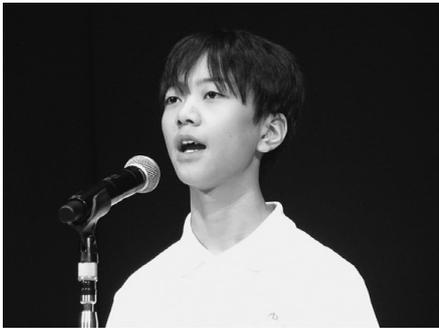
神楽の感動を届けたい。関わり方は変わっても、神楽を受け継ぎたい。

それから私は、あの女性にかけてくださった言葉を原動力に、自分にできることをしようと、心機一転、裏方として団員のサポートにまわりました。

私にとってかけがえのない存在の石見神楽。神楽のない生活が考えられないほどいつも近くにあるその存在を守りたい。

だから私は、これからも胸を張って石見神楽を継承していきます。

皆さんもぜひ、あなたの街にしかない大切な伝統芸能を守り、つないでいきませんか。



優 秀 賞

「ありがとう」と伝えたい

松江市立第一中学校
1年 若槻 亮太

「ありがとう。」いつも見守ってくれている祖父が、ほほえんでいるような気がします。

皆さんは誰かに意識して感謝を伝えたことはありますか。意識して感謝を伝えるというのは感謝の気持ちを相手にはっきりと意図的に伝えることです。

僕はいつも自分のために声をかけてくれる親に、あまり感謝の気持ちを伝えていませんでした。それを意識することはありませんでした。

そんな僕が、感謝を伝えることについて考え始めたのは祖父とのある出来事がきっかけでした。祖父は僕が小さいころ、将棋やボードゲームで遊んでくれるとても優しい人でした。その祖父に会いに行くため、おとしの12月、僕はいつものように祖父母の家に行きました。祖父は寒い冬にも負けず元気な様子で、「これ、おこづかいだ。でも、お年玉はな、大谷翔平と一緒に後払いだ。新年にまたおいで。」と笑いながら話していました。喜んで受け取ったものの、僕はその日おこづかいをもらったことへの感謝をきちんと伝えないうまま、家に帰りました。

次の日、いつものように学校に行き、いつものように下校していると、焦った様子で姉が、「おじいちゃんが……。」と言ってきました。何を言っているのかよくわからないまま車に乗せられ、祖父母の家に向かいました。そこには和室に安置されている祖父の姿がありました。僕は祖父の手を握りました。昨日のような温もりはありませんでした。そして顔にかけてある布を取り、祖父の顔を見ました。少しほほえんでいるようでしたが顔は白く、昨日までの活気はありませんでした。昨日まで話していた人が急に死んだと言われても理解できず、僕は信じることができませんでした。

僕がようやく現実を受け止めることができたのは、次の日、再び祖父母の家を訪れたときで

した。祖父の「いらっしゃい。」という活気のある声が聞こえなかったからです。僕は初めて人間が「亡くなる」ということを知ったような気がしました。それと同時に後悔があふれてきました。なぜおこづかいのお礼を言わなかったのだろう。なぜこれまでの感謝をきちんと伝えてこなかったのだろう。伝えようとしても伝えることができない。いつか伝えればいいと思っていたけれど、もう二度と伝えることができない。僕はとても後悔しました。祖父は目の前にいるのに、「ありがとう」と言っても返事がない。とてももどかしさを感じました。祖父がいることが当たり前ではなくなった日でした。

日々の当たり前だと思っていたこと。その全ては当たり前ではありません。たとえ小さな出来事でも、僕のように後悔する前に、感謝の気持ちを直接言葉で伝えることが大切だと思います。

まずは、一番身近な存在である家族にいつもの感謝の気持ちを素直に伝えたい、そう思った僕はそれを家で実践してみることにしました。今までは自分から伝えるのは恥ずかしくて、家族に感謝の気持ちを伝えることがあまりなかったからです。ですが、思い切って、「いつもありがとう。」と伝えてみると、とても喜んでくれて、家族の空気もより温かくなったように感じました。そして、家の中で感謝を伝える言葉が飛び交うようになり、家族の笑顔が増えました。僕はそれがとてもうれしいです。

今、この瞬間も、二度とくることのない、かけがえのない時間です。皆さんも日々を大切に、日常の些細な出来事の中でも意識して感謝を伝えてみてはどうでしょうか。きっと、より幸せを感じる時間が増えるはずだ、そう僕は思うのです。



優 秀 賞

私にできること

吉賀町立柿木中学校
2年 齋藤 望綺

みなさんは、「ヘアドネーション」という言葉を知っていますか。「ヘアドネーション」とは、病気や事故などで髪の毛を失った人たちのために、寄付された髪の毛で医療用ウィッグを作り、無償で提供する活動です。

一つのウィッグを作るには、最低でも31センチ以上の髪の毛の長さが必要で、約30人から50人分の髪の毛がいります。ウィッグの需要は多いのに、髪を寄付する人は少ないそうです。

私は幼い頃、入院したことがあります。同じ病室に、私と同年の女の子がいました。その子とは、約1ヶ月間、同じ部屋で過ごしました。

その中で、楽しく関われる時間とそうでない時間がありました。そうでない時間とは、その子がつらい治療をするときです。

薬の影響で、日に日にその子の髪の毛が抜けていき、私は小さいながらに衝撃を受けました。その子は

「髪がなくなっていく、嫌だな。」

と言っていました。私は、髪の毛があることが当たり前だと思っていたので、もし、自分の髪の毛がどんどん抜けていったら、とても不安で悲しくなると思います。

なんとかしてあげたいと思ったけれど、その子の病気を治すことも、髪の毛を増やしてあげることも、私にはできません。そこで私は母に「私に何かできることはないの。」

と聞くと、母は

「髪を伸ばして寄付することができるよ。」

と教えてくれました。そのとき私は初めて「ヘアドネーション」という言葉を知りました。

私は小学生になってから、髪を伸ばし始めま

した。長い髪は、洗うのも乾かすのも時間がかかります。長い髪が嫌になり、途中で切りたいと思ったこともありました。あきらめずに伸ばし続け、小学3年生のときに、31センチの髪を無事に寄付することができました。私が寄付した髪の毛が、その子のウィッグになるとは限りません。しかし、その子が笑顔になることを思いながら、髪を伸ばし寄付できたこと、誰かの役に立てたと思うとうれしかったです。

そして、2回目の寄付は、小学校卒業後の春休みでした。1回目のときは、入院中に会ったその子のことを思いながら伸ばしていましたが、2回目のときは、ウィッグを必要としているたくさんの方のことを想像しながら伸ばしました。人の役に立つこと、人のために行動することは、相手にも喜ばれますが、それと同時に、自分自身も幸せな気持ちになります。

最近は、「髪がないことも個性として受け入れ多様性を認め合う社会をめざそう」という考え方もあるようです。ですが、そのままの姿で街を歩くことに抵抗がある人は、まだまだ多いと思います。そして、髪がない人を受け入れる社会が、今の段階で整っているとはいえません。

人は社会の中で関わり合い、お互いに支え合いながら生きています。私も、知らないうちに誰かから助けてもらっています。私にもできることは、髪を伸ばすこと。悩みを抱えている人が、前向きに希望を持って過ごせるように、今後も寄付する活動を続けていこうと思っています。

一人一人が自分らしく生きるために、これからも誰かのために思い、誰かの役に立つ活動をしていきたいと思っています。



優 秀 賞

未来へつなぐ

邑南町立瑞穂中学校
2年 猪原 瑠愛

それは1冊の焼けた日記でした。

沖縄修学旅行の1日目、私たちのグループは、民泊体験で、仲原さんの家に泊まりました。仲原さん家族と、美しい砂浜で遊んだり、沖縄の食事を一緒に食べたりと楽しい時間を過ごしました。

食後まったりしていると、仲原さんが、「リーダーさん、ちょっと来て。」といわれたので、私だけ仲原さんがいるテーブルに座りました。

仲原さんは、1冊の表紙が黒く焼けた日記を取り出し、静かに話してくださいました。その日記は仲原さんのお父さんが書かれたもので、終戦後、直接渡されたものであること。読谷村はアメリカ軍が沖縄本島に最初に上陸した場所で、一面が焼け野原になったこと。今までの仲原さんとは別人のような真剣な顔でした。

私たちは、今年4月、沖縄修学旅行に行きました。私は学習係。平和集会の内容を考えました。3日目に平和の礎で行う集会です。沖縄南部のがけの上にある、沖縄戦で亡くなったすべての人の名前が刻まれた石の屏風が並んでいる場所です。

学習係の話し合いでは、千羽鶴を贈る案も出しましたが、私は、「平和宣言をしたい」と提案しました。言葉で伝える方が、広島原爆や沖縄戦を調べた私たちの思いがしっかり届くと思ったからです。この案に決まって、私は宣言を読み上げる役に立候補しました。みんなから入れてほしい言葉を集めて文章を作りました。

平和宣言の中で、私が特に伝えたかったのは最後のところでした。

「私たち一人一人の力は小さいです。けれども、その力が集まると大きな力になると思います。私たちは平和な社会の実現に向けて何ができるかを考え、努力し続けることをここに誓います。」

平和集会はいい雰囲気で行われました。私たちの思いがしっかり伝えられたと、自分でも満足していました。

先日、記念写真が配られたのをきっかけに、民泊の話になりました。先生から、「民泊先で

沖縄戦について、話題になった？」と聞かれ、私は思い出したのです。私だけに見せてもらったあの焼けた日記のことを。あの話は他のメンバーは知りません。それを私は誰にも話していませんでした。

平和集会で、平和に向けて「頑張る」と宣言した私が、自分にしかできない「戦争を伝えること」ができていなかったのです。

改めてメンバーに日記の話をする、「仲原さんは戦争のこと忘れてほしくないんだよ。」と言ってくれました。もっと早く話せばよかったと私は思いました。

「大切なことでも、時がたてば忘れてたりおろそかになったりする。」これは、誰でも経験があることだと思います。

例えば、広島原爆資料館で皮膚が焼き付いた服や家族を探し続けた人々の証言を見た時、原爆の悲惨さを強く感じました。また沖縄のひめゆり資料館で、自分たちと同じくらいの生徒が軍隊とともに行動し、多くの犠牲者が出た様子を見ると、戦争は二度としてはいけないと強く思いました。

けれども、時がたてば平和の大切さを考えることが少なくなり、私のように伝えるべきことを伝えられず、日々何となく過ごしてしまうことが起きてしまうのです。

そんな私たちはどうしたらいいのでしょうか。「ずっと忘れないでいること」はできません。けれども、「思い出すこと」ならできるのです。

私たちは、つらい体験を語り継いでいる人たちの顔を、「思い出す」ことができます。つらい思いを胸に秘めて笑顔で接する人たちの「思い出す」ことができます。必死で伝える人の顔を思い出せば、私たちは「思い出し」て、「想像する」ことができるのです。

私たちは、平和な世の中を未来に「つなぐ」という大切な役割をもっています。一人一人ができることを考え、学んだことを常に思い出しながら平和の大切さを言葉で伝え続けること。これは、私を含め「誰もがすべきこと」なのです。未来へ平和をつなぐために。



優 秀 賞

「買えない」を「変える」

飯南町立頓原中学校
3年 渡邊 陽南

2025年住みたい田舎ランキング子育て部門2年連続第1位

私たちの住む町、飯南町です。自然が豊かで地域の人も温かく、安心して過ごせる町。でも、私には不満もあります。それは買い物ができる場所が少ないこと。普段訪れるショッピングモールは車で1時間。気軽に行ける場所とは言えず、私にとって刺激の少ない町のように思えます。だから私は自分の町に買い物ができる施設があったらなあと思っています。皆さんは自分の町に何を求めますか。

私が町のことについて考えるようになったきっかけは、総合的な学習の時間です。小学校のときから町について学び、地域資源や地域の魅力、課題について学んできました。そして今年、これまでの集大成として、「飯南町が将来帰ってきたい町になるには」をテーマに個人研究を進めています。

これまでアンケートをとったり町の人へインタビューをしたりした、私なりの分析を述べると、飯南町の良いところとして、自然が豊かなこと、子育て環境が良いこと、子どもの医療費無料など町の人はいくさんの魅力を感じていることが分かりました。他にも移住や農業支援で人口を増やす方策も進められ、町を活性化する努力がされています。また、誇るべき施設として出雲大社にしめ縄を奉納するしめ縄館があることも町の良さの一つだと思います。

逆に抱えている課題としてはまず一番に、人口減少が進んでいること、そして、空き家が増えていることや交通機関が乏しいことが挙げられます。なかでも、空き家問題は、治安が悪くなったり火災の心配が起きたりと住民の不安にもつながっています。飯南町もウェブなどで空き家情報を紹介していますが、なかなか借り手が見つからない状況です。そして、買い物問題。食料品のお店はありますが、必要最低限のものしかありません。

人口が減っている町なのだからこうなるのは仕方ない…でも今この街に住んでいる私たちは

やっぱり、今、住みやすい町になってほしい…。

そこで私は、飯南町の課題を解決するために、空き家をお店として活用していくことを提案します。町や県からの助成金などで空き家を改装し、若者や移住者がいろいろなお店を出店できる町にする。例えば、若い人向けの服や雑貨を置くお店やスイーツ、パンを売るお店。アイデアひとつでいろいろなことを実現できる町…。素敵だと思いませんか。そうなれば、飯南町は夢を実現できる町になるし、そのお店は、地域の住民の交流の場となり、繋がりも深くなっていく…。

買い物に困難を抱える地域は日本中に増えています。これは単に地方だけの問題ではなく、人口減少が進む社会全体の課題でもあります。だからこそ、私たちの町、飯南町でこの課題を解決することができれば、その取組は全国と同じような地域に希望を与え、全国の課題解決にもつながっていきます。

飯南町に買い物ができる施設が欲しい。そう思うのは単なる私の願いであり、今のままではとても実現できそうもないことです。でも住人の私たちが何とかしようと思わなければなんにも変わらないのではないのでしょうか。仕方がないとあきらめてしまえば、衰退するだけ。だからまずは自分の願いや思いを言葉にすることが第一歩だと私は考えます。

そして、思うだけではだめで、実際に行動に移していくことが大切で、このことが課題解決につながっていくのです。今、こうやって「空き家を買取物施設として利用してはどうか」と述べているこの弁論も私にとっては行動の一つだと考えています。また、秋に行われる地域のイベントで自分のブースを出すことで、解決への可能性を探っていきたいと思っています。

自分の町を、行動し変えていけるのは住民である私たちです。皆さんも地域のことを自分事として考えてみませんか。

小さな町から始まる挑戦が、やがて大きな変化を生む。私はその一歩を踏み出します。



優 秀 賞 「普通」とは

出雲市立向陽中学校
2年 梶谷 倅

「普通って、何？」

時々そう思うことがあります。

私は、日常生活でよく「普通」という言葉を耳にします。例えば「普通は笑うでしょう」「赤が普通だよ」など友だちとの会話に「普通」という言葉が出てきます。しかし、私には「普通」が分からなくなるのです。

小学生の時、私はかっこいいという理由で一人称を「オレ」にしていました。私はずっと自分のことを「オレ」と言っていたので、いろいろな場面で「オレ」と言っていました。

そんなある時、先生からこう言われました。

「自分のことは「普通」に私と言いなさい。」

この言葉を聞いたとき、私は「自分の普通は人とは違うんだ」と思い、自分を「オレ」ということを控えるようになりました。その時から私は「普通とは何か」を考えるようになりました。

例えば、女の子は制服でスカートを履くのが普通、男の子はズボンを履くのが普通、という人が多いと思います。

自分の好きなものを履けばいい。女の子もズボンを履きたければズボンを履けばいい。男の子もスカートを履きたければスカートを履けばいい。

私はズボンを履きます。「正式な場でスカートを履かないなんて非常識だ。」と思う人がいるかもしれませんが、私はそれがいいのです。それが私の「普通」だからです。

私は、人には人の「普通」があるのではないかと思うようになりました。制服のことだけではありません。髪や好き嫌い、タイプ、生き方、この世にはたくさんの「普通」があります。そして、そのたくさんの「普通」と向き合っていくことが大切だと思うのです。

私がこの文章を書いている時、思い出した言葉があります。それは1年生の時のLGBTQ当事者の方の講演会で紹介された言葉です。

「みんな違って、みんないい。」

私はこの言葉をもっと知りたいと思い、調べてみました。作者は金子みすゞ。詩人で26歳の若さで亡くなられたそうです。その金子さんが生前書いた詩、「私と小鳥と鈴と」の中に「みんな違って、みんないい」と書かれたそうです。

私がこの詩を調べて一番驚いたことは、この詩が1924年に作られたということです。100年も前から多様性を受け入れた言葉があったという事実には、私は心を打たれました。

違っていいことは悪い、普通ではないとはなりません。一人ひとりの考えを聞くべきです。一人ひとりの考えを聞き、尊重していくからこそたくさんの「普通」であふれ、多様性が生まれていくのだと思います。

私はこの世の中に「普通」の人なんていないと思います。

他人の普通に合わせたら素の自分になれません。自分の中の「普通」は、相手にとって違う「普通」です。人と違うあなたの「普通」は、たった一つのあなたの個性であり、世界の多様性を生み出すのです。

私の通う向陽中学校には、向陽中学校人権宣言があります。その第3条に「私たちは、相手を受け入れ、互いの個性を尊重します。」と書かれています。私はとても素敵な言葉だと思っています。

そして、向陽中学校の生徒は互いの個性を認め合っていると私は思います。だから、この個性を尊重することを、「普通」を認め合うことを、全国に伝えていきたいです。



優 秀 賞

変わらないもの

奥出雲町立仁多中学校
1年 川島 苺香

「おかえり、大きくなったね。」曲がった腰に手をそえて、私を見あげながらニコッと笑い、学校帰りの私を毎日のように出迎えてくれた曾祖母。そんな私の曾祖母は、今年の春に102歳で亡くなりました。今日は、そんな曾祖母、大きいおばあちゃんの「老い」から学んだことについて話そうと思います。

大きいおばあちゃんは、100歳までは、外で草取りをしたり、洗濯物を干したり、自分のことは何でも自分でできる元気なおばあちゃんでした。私が成長する姿を誰よりも楽しみにし、「いっちゃん、学校の歌を聞かせてよ」と言い、歌を聞いて喜んでくれることもありました。そんな大きいおばあちゃんの元気な姿や喜んでくれることが私の喜びでもありました。しかし、100歳を超えると、少し様子が変わってきました。曲がっていた腰は更に曲がり、転んで怪我をすることが多くなりました。一緒に食卓を囲むこともなくなり、ベッドで寝ている時間が増えて、面と向かって話をすることも少なくなっていました。次第に認知症のような症状も出始めました。住み慣れた家なのに、自分の部屋の場所がわからなくなったり、何十年も昔のことが、あたかも今起きているかのように話したりすることが多くなりました。大きいおばあちゃんの全てが、今までと変わっていく気がして悲しい気持ちになりました。そんなある日、母がこんなことを言いました。「大きいおばあちゃんは私達に生きるということ、老いるということ、身をもって教えてくれているんだよ。だから、おばあちゃんの姿をちゃんと見て、覚えておいてあげようね。」

私はこれまで、「老いる」ということ、また人の「死」について、言葉の上では分かっていましたが、深く考えたことがありませんでした。母のこの言葉を聞き、私は大きいおばあちゃんの姿を見て、しっかり考えようと思いました。大きいおばあちゃんの様子は、みるみるうちに変わっていききました。「子供が泣いているよ」「虫が床にたくさんいるよ」

大きいおばあちゃんが、ずっと変わらず近くにいる存在だったからこそ、どんどん変わっていくおばあちゃんの姿を見ると心にぽっかりと穴が開いたような気持ちになりました。人が老いるということに向き合おうと思った私ですが、日に日に変わっていく大きいおばあちゃんを目の前にして、どんなふうにかければいいのかわかりませんでした。

しかし、そんなとき母は、「子供は帰ったよ」「虫ももういないみたい。大丈夫。」と声をかけていました。その言葉を聞いて、大きいおばあちゃんは少し安心しているように見えました。大きいおばあちゃんには、きっと子供の声も、私には見えない虫も、見えているのです。「人が老いるということ」を理解し、大きいおばあちゃんの言葉や行動を否定するのではなく、変わらない愛情をもって寄り添えばいいのだということ、母の対応から学びました。

家で過ごした最後の時間、大きいおばあちゃんに声をかけると弱った体でニコッといつものように笑ってくれました。体が弱りながらも、私が手を握ったら、ぎゅっと強い力で握り返してくれました。その時、どんなに老いていたとしても、大きいおばあちゃんが私を思ってくれていることに変わりはないのだと感じました。

私は大きいおばあちゃんの最期をともに過ごしたことで、人が老いて、外見や言動は変わってしまったとしても、その人自身の存在は変わらないということに改めて感じました。

人は誰しも、年をとれば今まで通りに動いたり、話したり、考えたりができなくなります。そしてそれは時に周りの人を戸惑わせてしまうかもしれません。そんな時こそ、私たちはそれを理解し、今までと変わらない気持ちで寄り添うことが大切だと思います。私はこれからの人生でも、大きいおばあちゃんへの変わらない思いを大切に生活して、どんな人にでも寄り添える優しさと愛情をもった、心の温かい人になりたいです。

令和7年度 少年の主張島根県大会開催要項 (第54回 島根県少年弁論大会)

- 趣 旨 中学生自らが社会の一員であることを自覚し、責任感に目覚め、健やかに成長することが求められている。この「少年の主張島根県大会」は、明日を担う中学生が日常生活を通じ、日頃考えたり感じたりしたことを広く発表することにより、中学生の自立心を育てる機会とするとともに、視聴する親や大人の青少年健全育成に対する深い理解・関心、協力を求めようとするものである。
- 主 催 青少年育成島根県民会議 島根県中学校長会（主管：益田市中学校長会）
独立行政法人 国立青少年教育振興機構
- 共 催 益田市教育委員会
- 後 援 島根県 島根県教育委員会 島根県警察本部 益田市
雲南市青少年健全育成協議会 島根県PTA連合会 益田市PTA連合会
- 開催日時 令和7年9月30日（火）10：00～15：15
- 開催場所 島根県芸術文化センター「グラントワ」
〒698-0022 島根県益田市有明町5-15（電話0856-31-1860）
- 発表者 県内在住の中学生及びそれに相応する学籍又は年齢にある者（国籍は問わないが、日本語で発表できること）で、地区中学校長会長より推薦された者。（地区別の定員は別表のとおり）ただし、県大会開催地区に限り定員より1名追加して推薦することができる。（発表順は別途事務局にて抽選）
※各地区の少年の主張地区大会実施に際して、地区内に特別支援学校・私立中学校がある場合、地区大会事務局はその地区の特別支援学校等にも地区大会の案内を送付すること。
- 実施方法 (1)発表時間 5分程度（6分以内を厳守）とする。（400字詰原稿用紙4枚程度）
(2)発表内容 ①社会や世界に向けての意見、未来への希望や提案など。
②家庭、学校生活、社会（地域活動）及び身の回りや友達との関わりなど。
③テレビや新聞などで報道されている社会のさまざまな出来事に対する意見や感想、提言など。

上記3つの中のいずれかに該当し、心からの思いや考えたこと、感銘を受けたことなどを、中学生らしい自由でユニークな発想で、飾り気のない言葉でまとめたもの。
また、商業的な固有名詞の使用は極力避けるようにする。使用する場合は、著作権・商標権等、所有者の許諾を得ること

(3)発表者の原稿に、生成AIを利用した執筆・推敲は認めない。（全国大会に準ずる）
(4)発表の様子の全部または一部は報道機関、ケーブルTV等により広報されることがある。
- 審査委員 別に定める。
- 表 彰 審査の結果、次の区分により発表者全員に賞状及び賞品を授与する。

島根県知事賞	1名（県代表）	島根県教育委員会教育長賞	1名
島根県警察本部長賞	1名	青少年育成島根県民会議会長賞	1名
審査委員特別賞	2名	優秀賞	10名
- 提出物及び提出先 各地区代表中学校長は、「別紙【要領】」に定めるものを提出日までに、島根県民会議事務局まで提出する。
【提出先】青少年育成島根県民会議 〒690-8501 松江市殿町1 県庁青少年家庭課内
T E L : 0852-22-6255
e-mail : nobinobi@shimane-youth.gr.jp
- その他 ・県代表者の発表は中四国ブロック枠で発表原稿、動画で審査され、各ブロック代表者（2名）は、「第47回少年の主張全国大会～わたしの主張2025～」[主催：(独) 国立青少年教育振興機構 令和7年11月16日（日）開催 於：国立オリンピック記念青少年総合センター]に出場する。

審査委員

元山陰中央新報社論説委員長（審査委員長）

島根日日新聞社論説委員

島根県警察本部人身安全少年課浜田少年サポートセンター課長補佐

島根県教育委員会益田教育事務所指導主事

青少年育成島根県民会議会長

益田市青少年育成市民会議会長

益田市教育委員会教育長職務代理

益田市小学校長会副会長

松本 英史 様

前田 幸二 様

藤原 正史 様

林 衛 様

高橋 賢史 様

中島 英二 様

齋藤 哲瑯 様

小田川 治 様

来賓

島根県知事

島根県議会議長

島根県教育委員会教育長

島根県教育委員会委員（教育長職務代理）

島根県教育委員会委員

島根県教育委員会委員

島根県教育委員会委員

島根県教育委員会委員

島根県教育委員会教育監

島根県警察本部長

島根県警察本部人身安全少年課長

島根県益田児童相談所長

島根県教育委員会益田教育事務所長

島根県益田警察署長

島根県教育研究会会長

島根県PTA連合会会長

益田市市長

益田市議会議長

益田市教育委員会教育長

益田市教育委員会委員

益田市教育委員会委員

益田市教育委員会委員

益田市PTA連合会会長

丸山 達也 様

池田 一 様

野津 建二 様

原田 雅史 様

生越 洋子 様

黒川由希恵 様

植田 義久 様

高島 尊子 様

伊藤 康子 様

中村振一郎 様

原 孝悦 様

岩本 正義 様

松元 善生 様

中尾 節也 様

田中 修 様

坂手 洋介 様

山本 浩章 様

佐々木恵二 様

領家 芳明 様

原田 笑 様

山本ひとみ 様

森脇 達也 様

原 洋行 様

令和7年度 「少年の主張島根県大会」 地区大会概要一覧

地区名	中学校数	特別支援 学校数	出場枠	開催日	場 所
松 江	19	5	2	8月29日（金）	松江市八雲アルバホール
安 来	5		1	8月29日（金）	アルテピア 小ホール
出 雲	15	1	2	9月8日（月）	出雲市役所 大会議室
雲 南	6		1	9月3日（水）	掛合交流センター
飯 石	2		1	9月2日（火）	飯南町立頓原中学校 体育館
仁 多	2		1	9月2日（火）	奥出雲町立仁多中学校 ランチルーム
浜 田	8	2	1	8月29日（金）	石央文化ホール 大ホール
大 田	6		1	9月3日（水）	大田市立第一中学校 第一図書館
江 津	4	1	1	9月5日（金）	江津市総合市民センター ミルキーウェイホール
邑 智	6	1	1	9月2日（火）	阿須那公民館 大会議室
益 田	9	1	2	9月2日（火）	島根県芸術文化センター 「グラントワ」 小ホール
鹿 足	5		1	9月3日（水）	津和野町立日原中学校
隠 岐	7	1	1	9月4日（木）	隠岐開発総合センター 島民ホール

* 出場枠：開催地の益田市は1名追加

令和7年度 少年の主張全国大会 審査結果

期日／令和7年11月16日（日） 13時～16時

会場／国立オリンピック記念青少年総合センター カルチャー棟大ホール

競順	ブロック	審査結果	都道府県名	学校名	氏名	タイトル
1	北海道・東北		岩手県	盛岡市立上田中学校	伊香成俊	未来は変えられる
2		審査委員会委員長賞	福島県	福島市立岳陽中学校	高橋美衣	見えないからこそ、見えたこと
3	関東・甲信越・静	審査委員会特別賞	群馬県	下仁田町立下仁田中学校	岩井ひなた	心の声に耳をかたむけて
4			東京都	葛飾区立亀有中学校	下田真愛	人とAIの間合い
5			新潟県	新発田市立川東中学校	宮村萌々香	いってらっしゃい、おかえり
6	中部・近畿	文部科学大臣賞	岐阜県	各務原市立蘇原中学校	イクバル ラリナ	教育の光と私の願い
7		国立青少年教育振興機構理事長賞	大阪府	泉大津市立小津中学校	中村詩織	JOIN ME
8			京都府	亀岡市立育親学園	秦小羽音	自分らしく生きる
9	中国・四国	内閣総理大臣賞	鳥取県	鳥取市立桜ヶ丘中学校	谷口鉄馬	伝える
10			愛媛県	新居浜市立川東中学校	吉岡友愛	「金平糖」と「爪」
11	九州		鹿児島県	鹿児島市立皇徳寺中学校	逆瀬川 ひかり	私たちにできること
12			福岡県	筑後市立筑後北中学校	水町淳太	新たな一歩

※全国大会開催要綱より抜粋

表彰

全国大会出場者全員（12名）に国立青少年教育振興機構理事長より奨励賞、全国大会出場者に選考されなかった都道府県代表者全員（35名）に同理事長より努力賞を贈ります。

伝える

鳥取県 鳥取市立桜ヶ丘中学校
3年 谷口 鉄馬

手を挙げた瞬間、みんなの息を吸う音が聞こえる。そして合唱が始まる。穏やかに始まった合唱が坂を登るように盛り上がっていく。僕はどんなふうに歌ってほしいかを、手で、そして全身で表現する。音楽が弾ける。僕が好きな瞬間のひとつだ。

僕は中学校で、合唱コンクールの指揮者を3度務めた。今年の曲は「心の瞳」。練習はまだ始まったばかりだ。

僕が指揮をするのは、口唇口蓋裂という病気の影響がある。僕の唇では、歌う時に上手に発音をすることができないが、指揮者なら、みんなの役に立つことができるからだ。

僕は生まれた時、唇と上の顎が裂けていた。このままでは、母親の乳を吸うことができずに死んでしまう。成長しても唇の隙間から息が漏れてうまく話すことができない。僕は、生まれてすぐに手術を行なった。

顎と唇の隙間は一応塞がったものの、鳥取の病院では、それ以上の対応はできなかった。両親が必死になって探した岡山の病院で、赤ちゃんの僕はまた手術を受けた。手術を何度も繰り返し、何年も通院を繰り返した。今でも年に一度、岡山に通っている。そのおかげで、今では食事を取ることもできるし、会話することもできるようになっている。

しかし、人と話す時に心に引っ掛かりがあるのも事実だ。発音がしにくいので、僕の言葉がどう受け止められているのか、相手の表情を気にしながら話すこともある。実際、何度も聞き返されることや、発音のことをからかわれることがあった。何度も聞き返される時は、相手に対して申し訳ない気持ちになる。からかわれた時は、馬鹿にされたことに苛立ちを覚える。何を言っても無駄だと感じて諦めるときがある。

小さい頃、口元にマスクをつけた僕のことを、見知らぬ女性が「かわいいねえ」と言った。しかし、マスクをとった僕の口元を見た女性は、僕のことを「かわいそうな子」と言ったそうだ。「かわいい」と「かわいそう」。わずかな違いかもしれない。けれど母にとっては大きな違いだった。「かわいそう」という言葉に、「不幸な子」という意味を感じたのかもしれない。母

は「鉄馬は可哀想な子じゃない!」と強く言い返したという。

そんな母も、「こんな体で産んでしまっでごめんね」と口にしたことがある。そのとき僕は「気にしてないし、大丈夫だ」としか返せなかったけれど、両親にとっても感謝しているのだ。この病気を治してくれるためにたくさんのお金をしてもらった。歯の矯正をするにも、僕の場合は特別な処置が必要なので、岡山の歯科医に毎月通わせてもらっている。ほとんどの場合、父が送迎してくれる。こんなふうに、お金も、時間も、愛情もたくさんかけてくれた。僕の唇は、その証だから。

そんな僕が、中学1年生で合唱の指揮者になった。未経験のこの役割に強くひかれ、すぐ立候補した。実際にやってみると、どうやったら歌い手に的確に伝わるか、手で伝える面白さを知った。自分なりに指揮をアレンジして、どの部分をどう歌ってほしいのか、楽しみながら伝えることで、今までにない達成感を得られた。正しい発音は一つだけど、人を感動させる音楽は無限にある。僕は、僕の指揮でそれを表現できることに、言いようのない喜びを覚えた。指揮することで表現できる世界の広さは、僕が歌うことで表現できる世界を大きく飛び越えていった。

口唇口蓋裂の子供たちは、話すこと、表現することを躊躇しがちだ。でも、自分のことを伝えたい、表現したいと強く思っている。諦めずに伝えてほしい。言葉でも、それ以外でも、自分を表現する方法は、きっとある。伝えたい思いを受け止めあえたら、病気や障害、色々な違いにかかわらず、お互いの世界はもっと広がるはずだ。

今年の合唱曲「心の瞳」はこう始まる。「心の瞳で君を見つめれば、愛すること、それがどんなことだか、分かりかけてきた」

言葉で言えない胸の暖かさを、見つめ合うことで伝えるという詩だ。

伝わる。きっと伝わる。だから伝えることを諦めないでほしい。言葉でも、音楽でも、見つめ合うことでも、自分らしいやり方が、きっとあるはずだ。

あ と が き

令和7年度「少年の主張島根県大会」の報告書をお届けします。本年度の大会は島根県芸術文化センター「グラントワ」を会場に行われ、県内13地区から選抜された16名の中学生が出場しました。

本年度の発表の特色は、「自己」「家族」「平和」「地域社会」「伝統文化」などテーマが多種多様だった点。コロナ禍以降、どうしても「自己」「家族」「学校」といった身近なテーマになりがちでしたが、少しずつ発表の視野が広がっており嬉しく思いました。どの発表者もテーマについて自分なりに捉え考えて、堂々と落ち着いた態度で発表されました。自身の経験を将来にどう生かしていくのか、これからさらに考えを深めてくれることを期待しています。

さて、そんな中学生の想いを、私たち大人は日頃しっかりと受け止め、行動できているでしょうか。子どもとの関わり方について、大人にも課題を与えられたと感じる大会でした。

この報告書には、県大会で発表された16作品と、全国大会で内閣総理大臣賞を受賞された作品を掲載しています。多くの皆さんに読んでいただき、今を生きる中学生の思いが一人でも多くの方に伝わり、青少年育成に各分野で活かされることを願っています。

令和7年11月

令和7年度「少年の主張島根県大会」
審査委員長 松本 英史

令和7年度 少年の主張島根県大会報告書

令和7年11月発行

編集 青少年育成島根県民会議

〒690-8501 島根県松江市殿町1番地（県庁青少年家庭課内）

TEL 0852-22-6255 FAX 0852-22-6045

E-mail : nobinobi@shimane-youth.gr.jp



HP



Facebook



Instagram



青少年育成島根県民会議
シンボルマーク